

令和5年度第3回 史跡小田原城跡御用米曲輪戦国期整備検討部会会議録

日 時：令和6年2月14日（水）午後1時～午後3時30分
会 場：観光交流センター1階イベントスペース
出席者：小野部会長、小沢副部会長、中島部会員、高妻部会員、宮内部会員
オブザーバー：神奈川県教育委員会文化遺産課 富永副主幹
事務局：文化財課 湯浅課長、小林副課長（史跡整備係長）、
佐々木副課長（埋蔵文化財係長）、大島主査、加藤主任、
伊藤主任
経済部小田原城総合管理事務所 清水所長、諏訪間主査
建設部みどり公園課 山崎係長

【開会あいさつ】

【資料の確認】

【会議の公開について】

【現地視察】

議事

報告事項 ア 前回部会の確認事項について（資料1）

資料1に基づいて事務局説明

事務局

前回の部会では、次の3点について報告した。まず、戦国期の遺構のうち、整備対象となりうる遺構の抽出をした。今日、改めてお配りした御用米曲輪の変遷の図であるが、主に戦国期4、5、6面を整備対象とするという形と、石組水路や堀を中心に区画を構成する遺構の抽出をした。その後、戦国期の遺構の切り合い関係を、上層下層として整理した。その報告の結果、石組水路などを基に分けた区画ごとの上層と下層の関係性についてはどのようなものであるかということで、ご指摘をいただいた。また、遺構面のレベルなどについての断面的な要素、あとは軸方向や距離について、30mの区切りがあるのではないかという話をもらったが、平面的な要素について指摘をいただき、これらの情報を整理することで、御用米曲輪の比較性の検討材料になるとともに、データをまとめたので報告する。

まず、資料1であるが、遺構面のレベルについては、南西が高く、北東に向かって低くなる可能性があることが分かっている。資料1は、石組水路の切石遺構の定面の高低差を示したものである。赤い矢印の方向に対して低くなっている。先ほど、現場でご覧いただいた場所を含む北側の様相について説明する。北東、南西方向に伸びる石組水路に

については、北東に向かって低くなっている。これは、地形に沿ったものとなっている。一方で、北西から南東方向に伸びる、先ほどクランクしたものも含めた石組水路については、北西方向に向かって緩やかなものではあるが低くなっている。遺構の確認面としては、北西側の方がやや高くなっているので、地形に逆らう形で石組水路が作られて、配置されているということが分かっている。

一方、南側の様相について説明する。西側の石組水路については、地形に沿う形で北側が低くなっている。南側の水路については、山のへりを沿う形で配置されていて、池に向かって低くなっていることがわかっている。切石敷遺構周辺の黄色い範囲については、レベルの数値で追っている状態だが、一部、分水嶺のようになっており、区画Jダッシュの面が高くなっているということが考えられる。この高まりの範囲というのが、こういった場所になるかということ、前回の部会で報告した添付資料Jダッシュに当たり、大型の礎石建物などがあった場所となる。なので、この場所が中心となる範囲と想定される範囲であるが、周りに比べて高い場所であったということが想定される。レベルについては、中心の部分が高いということまではわかった。

次に、資料2だが、建物や石組水路の軸についてご指摘をいただき、区画ごとの関係はどうなのかということ、それぞれの軸が同じか異なるのかということについて確認した。

そこで、石組水路、溝、堀、建物などの主軸を測りデータ化したものが、資料2になる。上段のグラフが、北を見て、東に振れているもの、下段のグラフが、西に振れているものである。ここで、今、横軸でピックアップしている遺構については、戦国期全体の傾向を見のりと、整備検討対象としている戦国期4面から6面の傾向を比較するために、この場では、戦国期全体の遺構を対象として、計測をしている。横軸の四角がついているものが、戦国期3面から新しいものである。何もついていない無印のものが、4面から6面、整備対象検討としている遺構の面のもので、三角がついているものが、戦国期6面以降に切られている、戦国期7面より古い遺構になる。グラフは左から右にかけて古くなっていくような形で並んでいる。

上段のグラフの傾向を見ると、全部で47遺構をピックアップしているが、47遺構中25遺構が、48度±1度、東に振れている。それが53パーセントを占めている。下段のグラフについては、42遺構をピックアップしているが、そのうちの20遺構が、42±1度、西に振れている。この東に48度、西に42度という軸が、直行する形になるので、この軸方向が、御用米曲輪における主軸方向と想定される。これが、グラフの赤のラインに乗っている遺構である。

また、上段のグラフのうち緑のもの52度±1度、下段のグラフの38度±1度が、それぞれ20パーセント前後を占めており、この軸も基準の1つであることが想定される。この主軸を持つ遺構を全体図に落としたものが、資料3と資料4になる。

資料3は、整備対象として検討している戦国期の4面から6面のものに落としている

ものである。前回の報告でJ区とさせていただいた範囲、先ほどの礎石建物がある所よりも隣のJ区としている範囲と、I区としている範囲に、この緑、1番多い軸より次に多い軸の方が集まっている傾向が見られる。これが、時期差によって違いがあるのかというのを確認をしようと思い、次の資料4、3面から7面の全ての遺構を入れた時はどうなるかと言うと、緑色、その最も多かった軸と次に多かった軸のものが増えるという形にはなるが、場所としては、決まった場所には分布はしないので、一定の場所で新しい規格のものが作られているという傾向は見られない。

今回、この赤い軸が、御用米曲輪の主軸となることを想定して、この軸を中心にこの角度で30mのメッシュをかけたものが、次の図となる。角度までは、おそらくはこれで大丈夫なのかと思うが、問題はどこを基準にするかということである。今、資料で提示させていただいている基準は、南側の山のへりである。

この山のへりを1つ基準として、京間で15間、29.5mのメッシュが入っている。そこから北側に行くと、石組水路に重なってくる。さらに北側に行くと、先ほどご覧いただいた石組水路の南端の、石組水路に重なってくるというところまでわかっている。一方で、南北方向については、ややずれてはいるが、クランクしている水路の位置と、先ほどのメッシュが乗っている石組水路が玉石作りから切石造りに変わるが、そのこの境に当たってくるというところまでは、今分かっている。これを1つの案として、提示する。

次の資料については、2種類の軸があるということで、緑のものもあるが、緑の軸については遺構が乗ってくることがなかった。おそらくは、メッシュをかけるとすれば、その前の赤の軸が相当すると想定している。

具体的な結論までは出せなかったが、前回いただいた宿題を元に検討した結果が、こういう形になる。私から以上である。

質疑

副部会長

2つあるが、1つは、先ほど話題になったJ区というところでは2つ建物跡が出てと思うが、この北東寄りの方の資料2では、赤で書いている建物と青で書いている建物があって、今こちらは赤の方で軸線を引いてと思うが、青の方も同じか。資料2で、赤と青と出ている。青の方は今回の整備の対象だと思うがどうか。

事務局

そのとおりである。青が対象となる。

副部会長

資料2には、今言ったJ区の北西、北東寄りの方の建物跡は、赤と青と二重にひいたも

のがあるが、今のこの緑色で示している方は両方ともかと聞いている。赤もか、青もか。

事務局

この場所については、青だけを引いている。

副部長

青だけを引いているが、ずれている。要するに軸線に2つ角度が入ってしまっているということか。緑と赤だと角度が違う。だから、全部今これは対象遺構の部分で引いている。同じ時期で引こうとしているが、その中に2つの角度が存在しているという理解でよろしいか。

事務局

そのとおり、混在している。

副部長

わかった。もう1つは、この京間15間のメッシュというもの。15間で引いた理由は何か。

事務局

最初に、基準となる長さが、どこが基準になるかというのを出した。ここで基準としたのは、石組水路が円礫から加工石材に変化する位置。そこから想定して割り返して出した。

部長

いや、そうでなくて、30mを基本とするということは、要するに京間15間、ここの礎石が京間でできてから、京間の15間を取ってということでやっているのか。そうすると、京間そのものではない。

事務局

そのとおりである。6尺2寸5分でもやってみたが、うまく乗らなくて、京間の6尺5寸でのせた。

副部長

6尺3寸でなく、6尺5寸で合わせたのか。

部長

6 尺 3 寸に乗らなかったか。

事務局

6 尺 3 寸だと微妙に合わない。いま 1 番合う距離が 6 尺 5 寸であった。もっと色々試してみたいと思っている。

副部長

京間 15 間のメッシュというのは、なぜ 15 間だったのか。

事務局

前回の部会で、大分市教育委員会の方に大友館の事例を話してもらった。その中で、門や塀の間隔が 30m ごとになっていて、何かしら基準のようなものがあるのではないかという話があった。そこで、部会長からも御用米曲輪でも 30m のメッシュを基準とした場合、何かあるのではないかとのお尋ねがあった。

部会長

正確に言うと、大分市で指摘したのも元は私である。門の位置が概略 30m ぐらいの間隔で出た。大友館の建物は 6 尺 5 寸なので。だから、館内部の区割りもそれでやっているだろうから、6 尺 5 寸の倍数で検証してみようとなった。6 尺 5 寸の 15 間というのは、ちょうど 100 尺の近似値になる。16 世紀後半の段階で、尺から間に変わってきてるので、尺だと 30.3m になってしまうが、間の方をそこに乗付けてみると、ちょうど 15 間ぐらいがその近似値になる。一乗谷の町割も館の地割もほぼそれでできており、30m という数字が概算で出ていたから、大分では門の位置がぴったり出てきたので、これはいけるという話になった。

だから、それをここでやるのであれば、建物が 6 尺 3 寸だったならば、やはり 6 尺 3 寸の倍数の中でやったらどうなるか。あるいは 100 尺をもし仮に当ててみるのであれば、30.3m でやってみたらどうなるかという検証が必要なのではないかと、私は理解した。

ただ、大友館も、まだ門の位置と主殿の前面にある溝がちょうど 30m 近似値ぐらいに乗っているので、それが多分生きてるという話ぐらいで、私としては京間 15 間の近似値で全体が計画されてるという推定もできるのではないかというぐらいのところまで止まっているのが本当のところだと思う。

私の方からも質問だが、山すそを東西方向の軸にしたのはいいが、南北方向の軸は何を基準に引いているのか。

事務局

南北方向の軸は、この 東西方向の軸が乗ってくる、東西に走る石組水路があるが、その石が玉石と切石に変わる変換点があり、前回は J と J ダッシュの間で区画を分けた時に用いた。

副部会長

なっていない。

部会長

これは仮説だからいいが、これ素直に見てると、もう少し東西方向の基準軸は北へ上げて、北の方に 1 本、東西の大きな石組溝があるが、ここへ持っていった方がいいような気がする。そうすると、割といろんなものが乗ってきそうな気がする。

要するに、ちょうど 15 間の半分ぐらい、その分を北へ軸を持っていくと、例えば 1 番南の方の、K の辺りの庭のラインのあたりも、ちょうど、境がここぐらいまであがってくる。今言っているのは、南北方向の軸を、I と J の境の東西溝、そこへ持っていったらどうかということ。はっきりしてるのは、そのくらいだ。

そうすると、それをやると目分量だけでも、ちょうどあの K の所の、あの落ち込んでる池の所から、丘へ上がった辺りのラインがこの辺りに来るんじゃないかなと思う。あまりこだわらないけれども、もう少し南北の振れの方もはっきりした遺構でいくつかシミュレーションした方がいいのではないかなと思う。それがうまく当たるかどうか、よきに計らってほしい。

ただ言えるのは、割と 30m 弱のところで、いろんなものがうまく当たってきそうな気はする。これ、結構いけるかなという気はした。今回掘っていたあの石組水路もちょうどそこへ、ちょうどこの 30m メッシュのラインが来ている。だから、割とそれに近い数字のところに行ってる可能性はあるかなと思って見ていた。

あくまでも、結構大きなスケールの中での話なので、あまり細かいところで、少しくらいずれたからといって、そんな気にしないでよい。ただ、全体を推定していく時に、ここここを基準にしてメッシュを含んだらこうだった、東西の方ではこれを基準、南北ではこれを基準、これが今のところいくつかの条件がありよく合ったみたい、そういう説明をされるとそれなりに説得力がある。頑張ってくれたらいいと思った。

部会員

最初に話された高低差の話だが、この図だと黄色で描かれている切石敷の遺構の流れる方向が途中で変わっているのは、やはり問題があるので、長年の地震か何かで多分変わっていると思うので、現状を分析するとこういうことになったということなのかなと思う。

部会長

今日の地震の影響を見ていたら全然違う。だから矢印だけだとなっているが、実際の数字に直したら勾配はどのくらいか。

事務局

場所によるが、本当に微妙で 10cm とかである。

部会長

それでは、今日の発掘現場で地震のために落ちこんでいるのを見たら、当時それだったらみたいなのも含めて、何か色々ありそう。シミュレーションとしては面白いと思う。ただ、部会員が言うように、特にこの池のところは、どちらから給水してどちらに出したのかという問題があるので、池の真ん中で両脇に分かれていくというのは、これはありえないだろうという話にはなる。だから、将来的にこの池のイメージを復元する時には、これはこうだったけれどもこうではないかという、もう1つアイデアを用意しとかないと絵にならないと思う。そういう問題が出てくるのではないかと思った。何か発掘担当者から、どうぞ。

事務局

前回いただいた宿題は、遺構面の区画ごとのレベル差の違いはどうなのかというところであった。今、部会長が仰ったように、地震の影響などもあり、当時の遺構面のレベルが確認できるかというところ、かなり難しいところがある。砂利面のトップが生きているかどうかはわからない。ただ、石組水路は水路という遺構の用途を考えると、玉石のトップと底石のレベルを測ることによって、遺構面としての高低差を考えられるのではないかと仮定した。高低差を図に矢印を付けて表現したことによって、会所想定建物が位置するJダッシュという所が1番高いということがわかった。曲輪全体の中でも1番高い場所がJダッシュであり、西側のKとか池の方は下がっている。Jの場所というのがいい場所なのではないというところ。今回の高低差の中で、区画の中の優位性が見えたというのが、この矢印の裏に隠された意味だろうと認識している。

部会長

裏に隠された意味は、そういうことか。私は、水路、排水というか、流路はこういう方向で流れてるのかと思いながら聞いていた。

いくつか観点があって、それに対してシミュレーションしたらこうだったという風にやった方が、基本的に意味が出てくると思う。今回の話は面白かったが、なんでもやってみたら、こういう数字だったからこうでしたというのでは、やったらやるだけ、いろんな結果が出るような気がする。将来的に、さっきの水だったならば、どっちから流れ

て、どっち行って、池の水はどこから引いて、どこへ入ってきていたのかといったような目的を用意した上でシミュレーションした方が、より効果的であるというのが、個人的な見解である。あれやれこれやれと言っておいて悪かったが、そういう感じが少しした。でも、面白かった。それなりに、何か出てきそうな感じがする。

部会長

あとは、発掘した立場から言うと、3枚目の主軸方向とその次のところ、4面から6面の建物軸が赤と緑の2グループがあるというのはわかったけれども、これは建てた時期が違うのか、その辺の理解はある程度議論しておいた方が、これから整備しようと言った時にどれを出すのかという問題と直結してくるような気がする。すごく違うのと、何かしらの意味はあると思う。

副部会長

資料1の4枚目のところに、戦国第3面を加えた形で、この3面が緑になっている。これは何か。

事務局

ご覧頂くと、赤が48度プラスマイナス1度、緑が52度プラスマイナス1度。すなわち、一番近い値では49度と51度、2度しか変わらないという数値である。例えば、石組水路がオレンジなのに、その石組水路の側石に乗っている建物が緑になっている。これはおかしいと思う。一連の遺構のはずなので、この差は飲み込まれるべき誤差だと思うので、これは赤になるべきだということなどがこの図の中には含まれている。その辺の検証はしていないといけない。今この図を見ると、西側に緑が集中しているように見えるが、この図で決めるのは早計かと思う。

部会長

うまくこの辺をもう少し厳密にやってもらえたらいいのではないか。

最終的に一緒に使われている建物でも、建てた段階が違っていると、微妙に1度、2度、実は建物軸はずれたりして、それを他のまとまりごとにグルーピングがちゃんとできる。軸も少しずれる。それから、極端に言えば、柱も一寸とは言わないが、何度かずれているというグループができるので、今回は面白かったが、その辺を意識しながらもう1回やってもらってもいいと思う。

ありがとうございました。すごい丁寧な作業していただいたので、こういうのがそのうち生きてくるといいなと思う。

審議事項 ア 御用米曲輪の平場整備の方向性について（資料２）

イ 令和６年度の発掘調査範囲について（資料３）

（ア、イは同時に議論）

資料２およびプロジェクター画面に基づいて事務局説明

事務局

改めて画面で、今日見てもらった今年度調査成果と、次年度調査範囲を確認していただくということを含めて、画面で平場整備の方向性についてということで振り返らせていただく。今年度調査成果と、次年度の調査範囲ということで、今年度どうしてこういう調査があったのかというところから振り返って話をする。

現地視察でご覧いただいた現場なので、さっき見たなと思っていただければと思う。南側を中心に、御用米曲輪の戦国期の遺構の展開を報告している中で、部会長からこのような配置で建物位置を想定されているというご意見があった。

これを踏まえて北側の空間構成をどう把握するか、それによって南側の性格も分かってくるのではないかなというようにご指摘がある中で、まずはこの２本の石組水路がどう接合するかというところを中心にこの北側の状況を考えようというのが、今回調査に至った経緯だと思う。

その中で、対象地を地中レーダー探査をしたら、真っ赤になってしまってよくわからない。これが、40cm から 60cm。その下が青く抜けて 1 m から 1m20cm。さらに下の 1m20cm から 1m40cm だともうほとんど何もなくなってしまうという成果があった。

この状況を踏まえて、地中レーダー探査でよくわからないからこの辺りを掘ろうというような状況になって、掘り下げたところの 50cm から 60cm がこういう遺構面であった。この写真が真っ赤になっていた遺構面だという風に思いますが、カチカチの硬化面を持つ遺構面。地中レーダー探査から 10cm・20cm 程度の誤差が生じるものの、とりあえずこういうものが 50cm から 60cm で見つかったというのが、今回の地中レーダー探査と実際に発掘したところで確認の取れたところだと思う。さらに下げて、120cm から 130cm で、寛永地震の地割れを伴う遺構面が見つかって、北東部には大きなごみ穴があった。この穴になるが、これは地中レーダー探査、振り返ると、右上の掘り込み上の反射面で出てるのが、おそらく該当するだろうと考えることができる。一方で、その斜め左下に、多少、黒、赤と黄色の線があるが、あれがおそらく、今回見つかった砂利を伴う礎石建物の面ではないかと、結果論だがイメージすることができる。これより下、今日も見ていただいた遺跡が見つかった。でもこれは、地中レーダー探査だと、ほとんど反応していなかった。これが、今回の調査成果である。

現状、最新の図面として出来上がったのが、これになる。この中で言うと、１番新しい面が、今日見ていただいたこの面になる。礎石が２つあって、束柱のようなものもある。ここが 17 世紀前半までの遺構面だと認識している。

次に見つかったところでいくと、先ほど現地でも申し上げたが、アタリのあるピット

列が並んでおり、それに伴い、雨落ち溝と思われるものが検出されている。その位置関係から、このような柱列があったと考えられる。北側は、攪乱でやられているのでちょっとわからないが、このような図を想定している。一方、北東部でも砂利敷の玉石敷の空間があった。これは 17 世紀初頭までには収まるだろう。16 世紀末かもしれないが、先ほどの面よりは古いのは確かである。

次が、石組水路を伴う面で、北側に砂利を集中的に伴って、西側に玉石で見切りをしたようなラインがある。ここには、雨落ち溝が見つかったので、こういう建物があった可能性があるとし、南側の方にも石組水路の側石に礎石が乗るため、石組水路に足を乗せるような建物があった可能性がある。そして、この辺には植栽根と思われるような不整形の穴があったというのが、今回の調査の成果だと思う。

全体構成の中で、地中レーダー探査の結果とかも含めて、今回こういう範囲を調査したという流れになる。南側については、石組水路で区画の割り方ができるかなという状況がある中で、北側も同様に石組水路による割り方があるのが見えたかと思う。

そこで、来年度の調査をどうすべきか、という話になってくるが、こちらの部分については近世の蔵等があつて現実的な調査が難しい。この部分については、すでに、攪乱が中世面まで及んでいることが想定されるので、この範囲をやってもあまり効果が得られないだろうと考える。そうすると、この範囲ぐらいが来年度調査ができる範囲かなと思うので、この辺の調査範囲をベースにして、来年度、どこを調査するかというところを議論していただければと思っている。

どこを調査するかも、平場をどう整備するかというところに絡むので、今年度調査成果と、今後の見通し、調査ができる範囲という点を考えると、最大の範囲がこの範囲ではないかと考える。ご議論いただければと思う。

部会長

今、事務局の方でうまく問題点を整理してもらったと思うが、今最後に言われたように、全体をどうするかという問題と、それを意識した時に来年度どういう調査をするかというのは、セットであるということは間違いないので、アとイという 2 つの審議事項があるが、その辺は両方、ある意味関連させながら議論できればいいと思っている。

事務局

資料 3 を見ていただきたい。こちらは、御用米曲輪の平場整備の方向性についての資料になる。まずは事務局案として出した当初の案として、平場の南西部分だけを、戦国期の整備の対象とした場合のものを書かせてもらった。この南西部分においては、前回の議論で、戦国期の遺構を上層と下層に分けて説明したが、整理をするとすると、上層か、下層か、それとも上層と下層のハイブリッド型にするかの、3 つの選択肢があろうかと思っている。

今回お示しした資料は、下層を主なベースとして、一部、上層部分を加えたハイブリッド型になっている。このような形にした理由としては、池が最盛期であると考えられているところ等を理由としている。

また、整備対象と思われる一部が、礎石建物から掘立柱に建て替えられているという経緯もあったが、礎石建物跡の方を選択して、この図面を書いている。

それから、玉石敷仕上げや砂利敷仕上げなどと囲っている赤線が点線になっているが、こちらは、整備範囲が検討段階で確定していないことを表現している。これらの整備方法や整備対象遺構について、ご意見等いただきたいと思っている。また一方、今年度発掘調査をした箇所を含む平場の北東側については、資料では、過去の調査で見つかった遺構のみを表現している。こちらは、平場の北東側についての整備の構成が未確定のため、このようにしてある。

また、その他、すでに整備した北西土塁、北東土塁、北東土塁上の蔵跡と、それから、瓦積塀の整備範囲等を示してある。以上、説明したが、この御用米曲輪の平場の戦国期の整備の方向性を、こちらでご議論いただければと思っている。

部会長

ありがとうございます。この図でよくわからないのが、これは、南西と言うか、山側の裾のところ、これまで掘られていたところだけは割と遺構がしっかり書いてあって、ある意味、半分だけである。西側半分だけが書いてある。この東側半分、今回掘っている所も含めてだが、これは、遺構がわかったらそこも含めて議論しようというつमोरの絵だという風に理解してよろしいか。

事務局

平場の整備の方向性として、当初、事務局案では、西側半分のみを戦国期、左側は江戸期とするというのを出させてもらった。また、確かに、部会の意見で、平場全体を戦国期にしてはどうかというご意見ももらっている。なので、今はまだ部会としての最終的な方向性をもらっていないと思っているので、今回ご議論いただいた中で、それが出てくるかと思っている。そのため、事務局としてはまだ何も、東側半分の方向性が決まっていなと理解している。

部会長

ということは、一応そういう意味では、従来言っていた、半分だけがあったところだけをここに示してあるということで、決してこれで決まったわけでもないという、そういう言い方でいいか。

事務局

そのとおりである。

部会長

ありがとうございます。以上、事務局側からの説明をしてもらったが、まず、その説明についての質問等があったら受けたと思うが、いかがか。特に質問はないか。

それでは早速、本来の話に行きたいと思う。私の方からあまり積極的に言うのははばかられるかもしれないが、1つ大きな分れ目は、今まで調査した西側半分の、資料3で言えば色がついてる、遺構が見えているこの範囲に留めるのか、それとも、残りの平場を含めて、瓦積塀のところは、既に整備してしまったので、それ以外をこの一応緑色に示してあるような範囲、要するに土塁ギリギリぐらいまでを、一応 戦国期を中心とした整備の方向で、全体を持っていくということなのか、そこをまず明確にしたいと思う。これについて何か意見があれば受けたい。

部会員

平場の中で、戦国と近世が混在してるということになると、やはり来た人も分かりにくいという問題になる。東側部分を戦国ではっきりと示せるかどうかは少し置いといて、基本的に、あまりこの平場部分に近世は表に出さない方が、多分、来た人は分かりやすいのではないかと思う。

部会長

ありがとうございました。今の意見に対する意見でも結構である。何かあれば。

部会員

まったく、今の意見に賛成である。

副部会長

実は、史跡小田原城跡調査・整備委員会では、ちょうど今説明があったように、東側半分を近世、西側半分を戦国期という意見であったが、それは、元々は小田原城跡全体が近世の幕末期に合わせて、全体を整備する整備方針に合わせておこうというところからきている。ただ、御用米曲輪に関して、ここに近世の遺構と戦国期の遺構を合わせて表示をするというのに対しては、史跡小田原城跡調査・整備委員会の方でも賛成意見と反対意見があり、私は反対だったので、ここに来て平場が全部戦国期になるのであれば、大賛成である。

部会員

時代が混じっていると、見に来られた方はどの時代の何を見てるのか、混乱すると思

う。私も戦国期で統一した方がわかりやすい。それで、戦国期の遺構はないところもあると思うが、そこをどう表現として工夫するのが課題である。

副部長

先行して近世の整備はすでに行われていて、土塁上に関しては、すでに蔵の遺構の表示も行われている。ここまでを近世として、平場の部分に関して戦国期でまとめてもいいかと思う。やはり、前から話が出ているように、今、西半分しか分かっていない。東側がどうやって出るかは分からないが、この遺構全体のゾーニングが分かって初めて今出ている西側の遺構があると思うので、ここから先、発掘がどのような成果が出るかは分からないが、全体を含めて価値を示すのがいいと思う。

部長

ありがとうございます。皆さん、委員の方、大体同じような方向性を承認していると思った。

私自身も前から言っているが、この小田原城でやはり北条の小田原城というのが出てくるところはほとんどない。土塁とか堀切りだとか、ああいうものしかないので、ぜひ、こ城の中で、これだけの遺構が出たのだから、これを出していきたいと思う。私も各地の戦国期の遺構を見せてもらっているが、この遺構は、その中でも本当に十指に入るくらい、すごく保存状態もいいし、またインパクトのある、権力の中心としての性格が非常によく出てる遺構だという風に理解している。そうすると、東国でこれだけの遺構が出ているところは、ここと八王子城ぐらいしかない。なので、これは、ぜひ見せる価値があるし、逆にこれがあって、近世のあるいは幕末の小田原城そのものも、その延長の中でこうやって生きてきたかというのが見られた方が、小田原城そのものの価値も上がると、私は理解している。なので、委員の皆さんが発言されたように、大前提としては、この平場のところを戦国期の遺構表示で全体を統一するという方向を取りたいと思う。皆さん、よろしいか。

部会員

はい。

部長

ありがとうございます。それで、先ほどの何人かの部会員の方からも出ていたが、発掘調査が、東半分においてはまだまだ不十分である。なので、どこまで掘れてどこまで表示できるような遺構が出るかどうか未知数であるが、それを含めた形で、今のような大方針で望んでいくということを確認させていただいたということにしたい。史跡小田原城跡調査・整備委員会の委員である2人には、何かの時には、どういう形で説明する

かについては、また事務局と議論してもらえたらと思うが、確認を早めにとってもらえればと思う。

それで、この前、事務局は、途中で1回史跡小田原城跡調査・整備委員会に報告したいということ言ってましたが。それはやめてほしいと言って、部会で統一した意見が出るまで少し待ってほしいと言っていた。今日、それをまとめる。この後は、ある意味大原則はこうだった、部会としてはこういう方針であると、今は何かの形で伝えても全然問題ないと私は思っている。

事務局

現在、史跡小田原城跡調査・整備委員会は、今、来年度第1回目の開催日の日程調整をしている。その第1回目の中で、戦国期検討部会としてこういう意見が出ているみたいな報告ができればと思っている。その中で、事務局が説明するが、より詳しく説明するとなると、部会長に出ていただく必要があるかなとは思っている。

部会長

出席することはできる。でも、オブザーバーになるが大丈夫か。

事務局

そこは、委員長と相談するということはあると思うが、その可能性をここで確認させてもらえればと思っている。

部会長

日程さえ合えば、出席する。

事務局

了解した。ありがとうございます。

部会長

とりあえず、そういう方向が確認できた。次は、一番重要な何もないのに何を表示するのかという問題も含めてだが、この資料3の遺構そのものを、これをそのまま採用するかどうかは抜きにして、これに今回発掘している部分の遺構を入れれば、東の中でも南に、偏ってるところについては、それなりに全体の区画だとか、それから推定を加えれば、礎石建物等についてもある程度表現が可能だということが分かってきていると思う。今のような議論の発展から言えば、その部分についても、これもまたおそらく異論はないところだと思う、その辺、いかがか。よろしいか。そうすると、その次の問題だが、まだまだ空白地がたくさんある。先ほど事務局の方で、たたき台を作ってもらった

が、次の発掘可能な場所、何か出る可能性を残している場所、結構広い。どこまで掘れるから、あるいはどういう掘り方をしたらいいか。要するに、来年の1年しかない。それからもう1つは、2つある場所のうちのどちらを選んで、どういう掘り方をしたらよいかということについても意見を伺いたい。

事務局

資料4を見てもらいたい。この資料は、今、プロジェクターに出ている赤いところ、紙の資料では、濃い緑で区画されているところが、発掘可能な範囲であると考えている。その中で、来年度予算、まだ議会審議中であるが、そのまま認められた場合の広さとしまして、真ん中のところにオレンジで示してある220㎡程度になる。この程度の範囲で、発掘するとなると、1番分かりそうなところというのが、今示してある所になると考えている。

部会長

一応事務局案と理解していいか。

事務局

はい。予算から考えた場合の案になる。

事務局

予算的に、神奈川県積算基準で積み上げると、この面積になるというのが目安である。これを発掘調査可能範囲の中のどこに置くか、どう散らすかとか、どこに置くかというのを議論してもらいたい。

部会長

もう1つあると思う。こういう長方形220㎡を四角く発掘するのか、それとも、例えば今回出てる区画を大きく分けていくような石組溝について、それを追いかけていくというやり方がある。この方法だと、遺構はあまり詳細に取れないけれども、大きな意味での東半分の地区、その区画を調査していくという等、いくつかの方法があるかと思う。

事務局

トレンチ調査という手法も考えられる。

部会長

トレンチ入れて追いかけていって、それを広げるというやり方もある。そういういくつかの選択肢があるかと思うが、もし、意見があれば伺いたい。資料2の1枚目の図が、

今回掘っている場所の遺構がしっかりと出ている。これと資料 4 を見比べながら、どこをどう掘るのかという議論かなと思う。

部会員

今年度の成果というのに立脚して考えていくのがいいと思う。その場合に、今年度の調査で見つかったような見つからないような建物、水路脇の遺構で、結構重要そうだという、その性格をどのように想定してみると良いのではないか。以前、発掘された会所のようなものであるとすれば、今回の遺構が、果たして主殿のようなものとして想定できるのかということを考えることが、どう掘るかという前提になると思う。

部会長

私は、個人的に言わせてもらおうと、220 m²程度では何を追いかけても分からないと思う。まともに建物一棟を掘れるという面積ではない。今回の中で、礎石建物が上の新しい層では見えないという所については、先ほど現場でもお願いしたように、あれはもう少し下げられる所は下げて、その性格を出せるようにしておいたらいいと思う。そうすると、私はこの 220 m²を使って、この緑の区画の中に何本かトレンチを入れて、建物がもう少し分布しているような状態だとか、それから溝の延長がどこにあるかとか、その辺が分かって、建物は完結しないけれども、ここにも割と大型の建物がありそうだと分かると良い。あるいは逆に、全然遺構がなくて、広場ではなかろうかということを含めて、そういう検証ができないだろうかと思っている。輪切りでもいいし。それはまた発掘担当者の方と相談をしながら決めればいかと、私はなんかそんなふうに思った。220 m²をどこかに持って行って、そこだけ分かったからといって、この面積を推定するほどの条件は、あんまり用意できないと思う。それならば逆に、この 220 m²を使って、何本かトレンチを入れてチェックをかけて、さっき言ったような建物の有無、溝の確認をする、そういう情報の方が、まだあの表現の方法としてはいいのかなという風に思ったのだが、これはあくまでも私の個人的な考え方である。

部会員

発掘調査は、来年度まで限りなのか。

事務局

市の総合計画の中で、2030 年には、御用米曲輪を整備して一般公開するという予定を立てている。今後、整備に時間がかかる、実施設計、基本設計がある。それを逆算していくと、来年度に発掘調査が終わらないと、その次のステップに進めないと考える。発掘調査を延ばしてしまうと、ずるずる時間がかかってしまう。すでに、平成 22 年から整備のための発掘調査に入っており、御用米曲輪を既に 10 数年閉めたままである。市の

上層部や市民の方から、今どんな状態なのかとよく聞かれてしまう状況である。私どもとしては、なるべく今のスケジュールにのっとって、整備していきたいと考えている。

部会員

さきほど、話があったようにいくつかトレンチを開けていくと、スポットで分かってくると思う。そのスポットで分かった時に、おぼろげながら何か見えてくるということがあるので、そうすると、基本計画としてはその状況を立ててしまって、実際に、整備の方に本格的に持っていく時に、この部分が詳細に分からない限りは無理だという結論を出して、その場所を開けるというようなことを、考えてもよいのではないかと思う。

事務局

今回この発掘をした中で、先ほど見てもらったが、戦国期の遺構が必ず出るというわけでもないとも考えている。また、あちらこちら掘り進めて掘り散らかすような形になってしまう可能性もある。できれば、史跡なので保存する方法を第一に考えつつ、整備に必要な部分だけ発掘調査する形が良いと思う。

部会長

私は、時間とお金がつぶりあれば全部調査するという立場の人間だが、今回はもう上限が決まっている感じだ。

事務局

部会長の言う通り、お金と時間の話は重要である。基本的に、基礎調査は3年間という時限がかけられていて、来年度がその3年目に当たる。発掘調査を市単費でやるのは、難しいと思っている。時間の話は、事務局からも話をしたが、私からは、お金の見合いがあるということもご理解いただくと大変助かる。整備の方向性は、議論すればいいのだが、調査ということになると、なかなか、お金が難しい。あとは、文化庁が、どういう反応を示すのかは分からない。

もちろん、史跡小田原城跡調査・整備委員会、文化庁、県は、分かっていると思うが、調整が長引けば長引くほどお金がかかるということもある。そこは少しご相談させてもらい、来年でなんとか発掘が終わることを願っている。

オブザーバー（県）

今、基礎調査を3年でやることは、文化庁の方針であり、最初の補助の条件でもある。しかし、文化庁も予算を完全につけてくれたわけではない。もし、来年度すごくいい成果が出て、ここだけは拡張したいというようなことがあれば、相談することは出来ると思う。ただし、通常の成果なら、やはり3年間で収めてもらいたいと思う。

部会長

分かった。いい話を伺った。だけど、県も知っていると思うが、今回の発掘もそうだが、関東圏でこれだけ戦国期の遺構が、それも石造りで出てくる所は、そう滅多にない。だから、これは結構売り物であり、文化庁を説得に行く価値はあると思う。

オブザーバー（県）

来年度、主殿の遺構が結構出てきたとかいうことならいいが、通常の溝が出てきたとかだと、少し厳しいと思う。

部会長

遺跡が壊れてしまうわけではないので、そういう意味では今回できるところまでやって、それをこれまでの成果がうまく生きるような、推定を含めて整備ができればという道もあると思う。事務局の発掘担当者の側から言うと、今のようないくつか、特にトレンチで、もう少し掘られていないところは、ある程度推測でもいいから全体が見えるような形でやりたいというやり方と、どこか狙い打ちして、この範囲、予算の限りここを掘ろうという方とあるが、どういう風にしたらいいか考えはあるか。

事務局

基本、狙いうちだとは思いますが、どこを狙うかというところかなり難しいと思う。資料4には、大きな緑色の四角が下に2つあるが、狙うとするとこのどちらかしかないと思う。南東側は攪乱が大きい。残る部分を開けても硬化面が出るだけだと思う。北西部分は、近世の整備も進んでいるので、掘れる面積を考えるならば、あまりに少ない範囲の面積なら掘っても成果は多くはないと思う。

以上の点から、前回調査分を含めてどれだけ手をつけられるかということになる。今年の調査では、砂利が出たのでものすごく調査に手間がかかった。それから、県の積算基準は高いと思っているので、まとめて掘れば220㎡より多く掘れると思う。トレンチ調査だと、手間もかかるので、発掘できる面積は減ってくる。どっちもどっちというところで、どこをどう分けるかは難しいところである。そういう意味では、石組水路を狙うなら、大きな四角の真ん中の方がいいかも知れない。とにかく難しい。

部会長

この先も調査が続くのであれば、今回の調査に隣接させたところを掘るのが上等ではある。これはどちらかと言うと、遺跡全体を知り尽くしてる事務局が、この辺が可能性があると言って掘るしかないような気がする。

事務局

先ほどの部会員の話も含めても、第一次調査で、過去に掘ってあるトレンチを基準にして、そこをヒントにトレンチを設定すれば目安もあり、調査しやすい。その中では、今 220 m²と書いてある黄色の四角と緑色の北側の四角の中は情報が乏しいので、そこを開けるというところでも、既存調査区から広げて掘る感じが望ましい。

部会長

この黄色のところか。

事務局

この場所は、何も分かっていない。

部会長

事務局案の場所を掘るということか。

事務局

分かっているところから掘って追う場所と分からないところの3か所を開けるということである。

部会長

トレンチ調査と一か所を掘るの折衷案ということか。

事務局

そうである。できれば、そういう調査はしたくないが、仕方ない。

部会長

この緑の四角の面積が結構大きいから、この中がある程度でも分かれば、それなりに推測は出来ると思う。事務局から提案があったが、よろしいか。あとは、県に頑張ってもらって、もう1年、こんなに面白いから延長しようということで文化庁に相談してもらって、また考えるということでもいいと思う。では、来年度の発掘の場所、面積等については、今の事務局の説明があった、真ん中の緑のところを、過去の調査の脇と隣接と、少し外れたところを2箇所か3箇所ぐらいで、開いて掘るということによろしいか。

部会員

はい。

部会長

ありがとうございます。とりあえず、大きな意味で大体今日の議題は終わったと思う。今日も事務局の方で遺構の問題だとかいくつかやってもらった。ここに、資料 3 として、今までの意味を含めた事務局の平場西側の戦国期整備の案があるので、こういうものを叩き台にして、今回の発掘地それから来年度掘った状況を見て、どの遺構をどういう風な形で整理していくかについては、その結果を見ながらまた議論させていただきたいと思う。史跡小田原城跡調査・整備委員会への報告の段階ではこれでそれでよろしいか。今、急いでこれとこれという問題をやってしまうと整備案が 1 人歩きして、これだとなるので、大方針としてはこういう方向だということで話してもらいたい。もちろん、私も出席してほしいということなので、その時は頑張って出ていくようにする。何か事務局から追加はあるか。

事務局

来年度のスケジュールについてだが、史跡小田原城跡調査・整備委員会が 5 月に第 1 回を予定している。来年度部会の開催は、3 回の予定である。第 1 回目は、発掘調査が始まった後の方がいいと思うので、7 月下旬か 8 月か。次に、11 月とか 12 月ぐらいに 1 回、また 2 月当初に 1 回というような形になると思っている。

部会長

来年度の大きな流れから言うとどうなるか。その発掘。来年度の発掘があって、その結果を見て、部会としてはどこまでの議論をするのか。

事務局

部会としては、具体的な整備方法である。

部会長

そこまで議論するということになるか。

事務局

はい。令和 7 年度に基本設計に入りたいので、そこに提示する材料が揃うことが 1 番理想である。

部会長

逆に言うと、発掘がいつ頃までに終わって、こういう議論ができるような情報が用意できるのかというところが 1 番大きな問題だと思う。いつから掘って、いつ終わって、どういう情報が提供できるのか。それに合わせていきたいと思う。

事務局

現状変更の許可は出ているので、予算がついて段取りできれば開始できるが、早くてもゴールデンウィーク明けだと思う。5月か6月かだと思う。

事務局

スケジュール通りにやるとして、来年度まで基礎調査をできるので、翌年度は基本設計になる。南側の方がある程度固まれば、北側の方は、それに準じる形にならざるを得ないという印象を私は持っている。なので、最後の決定のところは、この部会を残すので、基本設計をやりながら、固めていくという手もあるとは思っている。ただ、平場全体を戦国期に整備するとかしないとかのところは、来年度に史跡小田原城跡調査・整備委員会や文化庁とのやり取りが多分出てくると思う。いずれにしても、戦国期整備検討部会として検討するところの基準が決まってくれば、例えば、礎石建物等の性格付けで、この時期のものにするとか、それをどう表現するかというところを、来年度は決めていただければありがたい。事務局であとはどこをやるという議論にすればいいとも思っている。例えばレプリカでやるとか、建物はどうやって表現するとかが見えてくればいいかと思う。どの建物を整備するというのが見えてくるといい。対外的な説明が、しやすくなる。来年度は、なんとなくでもいいと思っている。基本、再来年度に基本設計をやる。

部会長

再来年度は基本設計になるのか。そうしたら来年度は、きちぎちに議論しないでいいと思う。部会としての大きなやり方と説明ができればいいと理解した。それにしても、ただ来て会議だけやって帰るのは寂しいので、発掘現場は、ある程度見たい。

事務局

少しずつ進めていくという形で、今日いただいたこのメッシュをもう1回描き直してみたりとか、そういうことをやりながら、全体の整理の方向性を、史跡小田原城跡調査・整備委員会とのやり取りを含めてやっていくと思っている。発掘調査は、多分5月からは入れるだろうと思っている。

部会長

5月から入って、完全に終了しなくても、ある程度の成果が見える段階で部会をやりたい。

事務局

開けてみて広げるかどうかというところもあるので、1回、やはり8月とか暑い時期になると思うが、見てもらいたい。8月に見てもらい、方向性をご指導してもらった次の11月ぐらいの最終面で見てもらう。最後に調査のまとめみたいなところをやらせてもらえたら、文化庁に報告できると思う。

事務局

基礎調査のまとめを最後にやらせてもらえたらと思う。

部会長

基本的にそういう流れでということが分かった。ところで、史跡小田原城跡調査・整備委員会との関係も大切である。今回の報告だけではなく、来年度、もう1回、来年度の状況を踏まえてこうだということも、また根回ししなければいけないと思う。今回の発掘の方針と来年度の計画については、そのようなことでよろしいか。なにかあれば、今の議題以外に委員の方から伺いたいと思うが、よろしいか。

各部会員

特になし。

部会長

ありがとうございます。県からさらに何かアドバイスはあるか。大丈夫か。

オブザーバー（県）

特になし。

部会長

ありがとうございます。これで一応、議題、審議依頼は終わった。来年度は、8月、あるいは11月、あるいは3月ぐらいに会議を開くということで、早めに日程調整していただければと思う。

事務局

それでは、これもちまして本日の会議を終了する。皆さん、長時間の会議お疲れ様でした。